

## 高校野球部の動機づけ雰囲気チームメイトが及ぼす影響

平間康允<sup>1)</sup> 佐川正人<sup>2)</sup>

### The influence of teammate to motivational climate in high school baseball team

Kosuke Hirama<sup>1)</sup> and Masato Sagawa<sup>2)</sup>

#### Abstract

The purpose of this study is to examine influence of teammates on motivational climate of high school baseball teams, to find relationship between motivational climate patterns and teammates factors, and to contribute to improve teamwork and motivation of team members. The study was done on 389 high school players (age of 16.31 ± 0.76 years old) belonging to the four high school baseball teams in Japan. The research was carried out to ask each baseball team to fill out a questionnaire that I had made for the study. The contents in the questionnaire were based on their individual profile, such as ages, gender, and so on, and some questions to measure motivational climate of the team and to understand the interaction among the teammates, and to clarify how deeply the individuals were affected by his teammates. From the research, I found the following results: In case some players in the teams show some players who are physically gifted don't feel the need to practice, this negative factors often influence strongly the players' performance climate. There is a possibility that promote the improvement of competitive levels by intra-team competition progress. To enhance the teammates unity helps teams improve their mastery climate and competition results.

Key words: motivational climate, goal orientation, interaction between teammates, team work

動機づけ雰囲気, 目標志向性, チームメイト同士の関係, チームコーチング

#### I. はじめに

近年のスポーツにおける動機づけに関する研究は、動機づけを個人の問題としてだけでなく、集団としてとらえる動機づけ雰囲気に注目が集まるようになってきた。実際、スポーツ選手の多くは運動部やチームといった集団に属し、その活動の中で指導者やチームメイトとの相互作用を通して多くの影響を受けている。動機づけ雰囲気とは、スポーツ活動のような達成場面における達成目標の傾向である目標志向性の概念を個人から集団へと拡大したもので、Ames and Archer (1988) は「クラスやチームといった集団の持つ達成目標に関連する雰囲気」と定義している。本研究においても同様に、個人が所属する集団全体の目標志向性の傾向によって形成される雰囲気を動機づけ雰囲気ととらえ、様々な検討を試みる。ところで、目標志向性は、

能力の向上や新しいスキルの獲得に関心があり、練習や努力を重視し、その結果として納得のいく達成結果を目指す熟達目標を持つ熟達志向と、自分の有能さを誇示し高い評価を得ることに関心があり、努力よりも才能に価値を置き、他者との相対的な比較の上での高い達成を目指す成績目標を持つ成績志向の2種類に大別される(伊藤, 1996)。これら2つの目標志向性についてDuda and Nicholls (1992) は、熟達志向のアスリートはスポーツマンシップに対し好意的な態度を示し、成功を努力に帰属する信念を持つなどといった、スポーツにとって好ましい動機づけや行動を導くという熟達志向の重要性を示している。そして、動機づけ雰囲気についても同様に、その集団の達成目標を“熟達志向的である”と認知する熟達雰囲気と、“成績志向的である”と認知する成績雰囲気の2つが想定されており、測定尺度を開発したSeifriz et al. (1992) や Walling

1) 札幌国際大学スポーツ人間学部(非常勤)  
Sapporo International University Sport Human Department(part-time)

2) 北海道教育大学岩見沢校  
Hokkaido University of Education Iwamizawa

et al. (1993) によって, チームの雰囲気は熟達志向的であると認知する選手は内発的動機づけやチームの一員であることの満足感が高いことが明らかにされている。

運動部活動集団の動機づけ雰囲気に影響を与えるのは主に指導者であることから, これまでの動機づけ雰囲気に関する研究は, 指導方略や評価方法などへの指摘といった指導者に関するもの (Theeboom et al., 1995) を中心に進められてきた。しかしながら, チームメイトとの関係が選手に及ぼす影響の大きさや多様さが明らかになる (Weiss and Duncan., 1992; Smith., 2003) とともに, チームメイトによって作り出される動機づけ雰囲気についても検討がされ始めた。その中で Vazou et al. (2005) や Brustad et al. (2001), Carr et al. (2000) は, 指導者とチームメイトの両方が若いスポーツ選手の動機づけの鍵を握る存在になり, それぞれの動機づけ雰囲気への影響を識別することの重要性を訴え, Digelidis et al. (2003) や Duda and Nicholls (1992) は, 体育授業や青少年スポーツにおけるメンバー同士のチームワーク (相互協力やコミュニケーション) は熟達雰囲気を高める潜在変数の1つであるとしている。我が国においても, 藤田・松永 (2009) が, チームメイトの行動を選手がどのように感じているのかを測定する「仲間による動機づけ雰囲気」に注目しているが, 動機づけ雰囲気に関するチームメイトの影響およびチームワークとの関連についての研究は, まだそれほど多くない。そこで平間 (2012) は, チームワークやチームメイトの影響を受けやすいスポーツ (阿江ほか, 1993; 徳永ほか, 2000) の代表として野球に注目し, 部員主導での活動が多い大学野球部を対象に, チームの動機づけ雰囲気に対しチームメイトが与える影響について検討した。その結果, 互いに友好的な関係を築けずチームメイトから否定的な態度を受けると認知したり, 練習よりも成績を優先したりする選手が多い場合は成績雰囲気が強まること, チームに連帯感や一体感がありチームメイトから手助けや上達の支援があると認知する選手が多い場合は熟達雰囲気が強まることが明らかとなった。こうして, 大学野球部における動機づけ雰囲気とチームメイトやチームワークとの関係が見えてくる一方で, 次なる関心は高校野球部へと向けられる。それは, 中高生を対象にチームメイトによって形成される動機づけ雰囲気を測定した Vazou et al. (2005) が, 他の年代や環境との違いを検討することを以後の課題として挙げたことや, 高校から大学への進学に際し, 多くの選手が環境や人間関係の急変を余儀なくされること (土屋・中込,

1998), また, 仲間による動機づけ雰囲気の影響やチームメイトとの関係性のとらえ方などに校種間 (中学生や大学生など) の違いが示されていること (藤田, 2010) などから, 高校野球部と大学野球部との間でも, 動機づけ雰囲気に対するチームメイトの影響に関する異なった特徴がみられると予測したためである。

したがって, 本研究では, 高校野球部の動機づけ雰囲気に対しチームメイトが与える影響について検討し, 選手がチームメイト同士の交流の様子やチームメイトの行動をどのように認識しているかなどについて前報 (平間, 2012) の結果との違いも考察することで, 動機づけ雰囲気のパターンとチームメイト要因との関連についてより深い知見を得て, チームコーチングの発展に資することを目的とした。

## II. 方 法

### 1. 調査対象者

調査対象者 (以下, 選手) は, 北海道内の高校9校および本州の高校7校の硬式野球部に所属している男子野球部員 (以下, 選手), とし, 回答を得た389名 (平均年齢16.31 ± 0.76歳) を分析対象とした。

### 2. 調査期間

2014年5月 - 8月

### 3. 調査方法

各選手に, 本研究の趣旨を口頭および文書で説明した後, 調査用紙を配布し回答を求めた。その後, 験者が直接回収した。また験者が直接実施できない場合は, 各野球部代表者 (顧問教諭) に調査方法を口頭および文書で説明し, 実施の際には同一内容を代表者から各選手に説明した上で, 部活動時に回答時間を設けて記入してもらうよう依頼した。いずれの場合も選手から研究参加の同意を得た上で実施し, 回収は後日, 代表者から直接受け取る, または郵送によって完了した (回収率95.4%)。

### 4. 調査内容

#### 1) 個人プロフィール

選手の性別, 年齢, 学年, 所属運動部, 競技 (野球) 経験年数, 競技レベル (大会参加経験) に関するフェイスシートを設定した。

#### 2) 動機づけ雰囲気に関する質問項目

選手の所属する野球部の動機づけ雰囲気に対する認

知を測定するため、Seifriz et al. (1992) のオリジナル版を伊藤 (1997) が翻訳、作成した、スポーツ用の動機づけ雰囲気測定尺度 (Perceived Motivational Climate in Sport Questionnaire : PMCSQ) の日本語版を、若干の修正を加えて使用した。修正内容としては、オリジナルのPMCSQはバスケットボールチームを調査対象としており、「バスケットボールについて新しい技術を習得するために頑張る練習することが大切である」という項目があるため、本質問項目では文頭の「バスケットボールについて」という語句を削除したことである。この尺度は、能力を伸ばしたり、新しいことを理解し習得することを目的とする熟達雰囲気を測定する10項目と、能力についてよい評価を得ることや、否定的な評価を避けることを目的とする成績雰囲気を測定する10項目の計20項目で構成された。調査の実施に際しては、「あなたの所属する運動部全体として、以下の項目がどれくらいあてはまりますか？」と尋ね、回答は伊藤 (1997) の調査と同様、「非常にあてはまる (6点)」、「かなりあてはまる (5点)」、「ややあてはまる (4点)」、「あまりあてはまらない (3点)」、「かなりあてはまらない (2点)」、「全然あてはまらない (1点)」の6件法で求めた。

### 3) チームメイト同士の関係に関する質問項目

動機づけ雰囲気に影響を及ぼすと考えられるチームメイト同士の相互関係を把握するため、Ntoumanis and Vazou (2005) のチームメイトの動機づけ雰囲気測定尺度 (Peer Motivational Climate in Youth Sport Questionnaire : Peer-MCYSQ) と、運動部員の動機づけに対する影響要因に関する調査 (伊藤, 2001) を参考にした前報 (平間, 2012) と同じ質問項目を設定した。項目例としては、「他のチームメイトに上達するためのアドバイスを送っている」、「努力よりも才能が大切と考えている」、「練習中はいつもチーム内の誰かと競い合っている」など計40項目で構成された。調査の実施に際しては、「あなたの部のチームメイトの様子について、以下の項目がどれくらいあてはまりますか？」と尋ね、回答は2) と同様の内容の6件法で求めた。

### 4) 選手個人に対するチームメイトの振る舞いに関する質問項目

選手個人に対するチームメイトの関わり方が動機づけ雰囲気にどのような影響を及ぼすのかを調査するため、Vazou et al. (2005) のチームメイトの行動や発言に関する定性的調査を参考にした前報 (平間, 2012) と同じ質問項目を設定した。項目例としては、「チー

ムメイトはあなたがミスしたときはげましている」、「チームメイトはあなたが落ち込むような発言をする」など計20項目で構成された。調査の実施に際しては、「部活動での、あなたとチームメイトの関係について、以下の項目がどれくらいあてはまりますか？」と尋ね、回答は2) と同様の内容の6件法で求めた。

## 5. 統計分析

### 1) 野球部の動機づけ雰囲気とチームメイト同士の関係、選手個人に対するチームメイトの振る舞い

動機づけ雰囲気に関する質問項目の回答結果をもとに、Seifriz et al. (1992) や伊藤 (1997)、平間 (2012) が想定したものと同様の2つの動機づけ雰囲気因子 (熟達、成績) を抽出するために因子分析を行った。

チームメイト同士の関係に関する質問項目の回答結果をもとに、選手の所属する野球部におけるチームメイト同士の相互関係を表す因子を抽出するために因子分析を行った。

選手個人に対するチームメイトの振る舞いに関する質問項目の回答結果をもとに、選手が認知している自身に対するチームメイトの関わり方を表す因子を抽出するために因子分析を行った。このような青少年スポーツにおけるチームメイト関連の尺度については、測定する年代や環境などによる特徴の違いや新たな因子解釈の可能性も視野に入れた検討を重ねるべき (Ntoumanis and Vazou., 2005) とされていることから、前報 (平間, 2012) と同一の項目および因子分析を用いて検討した。なお、すべての因子分析は主因子法 (プロマックス回転) によって行い、その際、天井効果並びにフロア効果、歪度1.0以上の項目の有無、 $\alpha$  係数による信頼性や因子構造のモデル適合度 (GFI・AGFI) についても検討し、バートレット法により因子得点を算出した。そして、以降の統計処理はこれらの因子得点を用いて行った。

### 2) 重回帰分析

チームメイト同士の関係や選手個人に対するチームメイトの振る舞いに関する因子が、熟達志向的雰囲気、成績志向的雰囲気のそれぞれにどの程度の貢献度で影響を与えているかを明らかにするために、変数増加法による重回帰分析が行われた。チームメイト同士の関係、選手個人に対するチームメイトの振る舞いを説明変数とし、熟達・成績志向的動機づけ雰囲気を目的変数としてそれぞれ分析を行った。

### 3) 競技レベルおよび学年における比較

選手の競技レベルや学年によって、動機づけ雰囲気

やチームメイト同士の関係, 個人に対するチームメイトの振る舞いに関する因子得点に違いがみられるかどうかを検証するため, 各因子得点において一要因分散分析を行った. 有意差が認められた場合, Scheffe法を用いて多重比較を行った.

#### 4) 統計分析ソフト

統計分析には統計ソフトStatView-J5.0が用いられ, 有意水準は5%に設定された.

### Ⅲ. 結果

#### 1. 各測定尺度の因子分析結果

##### 1) 野球部の動機づけ雰囲気

野球部の動機づけ雰囲気に関する質問項目(20項目)の回答結果について主因子法(プロマックス回転)による因子分析を行った. なお, その際, 天井効果並びにフロア効果, 歪度1.0以上の項目はみられなかった. 因子分析の結果, 2因子を抽出した. その後, 因子負荷量がいずれの因子にも0.40に満たない1項目を除外し, 残った19項目について再度主因子法(プロ

マックス回転)による因子分析を行ったところ, 固有値1.0以上で, 因子負荷量0.40以上の「熟達雰囲気(10項目)」と「成績雰囲気(9項目)」から成る2因子を抽出した(表1). 次に, それら2つの下位尺度の信頼性について,  $\alpha$ 係数により内的整合性を求めたところ, 「熟達雰囲気」は $\alpha = .88$ , 「成績雰囲気」は $\alpha = .80$ という満足できる水準であった(表1). また, 各質問項目の6件法による得点の平均値および標準偏差については表2に示す. そして, この動機づけ雰囲気の2因子について検証的因子分析を行い因子構造の妥当性を検証したところ, GFI = .992, AGFI = .984, RMSEA = .049と, モデルの説明力やデータへの当てはまりは良好であることが示された.

##### 2) チームメイト同士の関係

チームメイト同士の関係に関する質問項目(40項目)の回答結果について主因子法(プロマックス回転)による因子分析を行った結果, 6因子を抽出した. その後, 因子負荷量がいずれの因子にも0.40に満たない項目や複数の項目に0.35以上の因子負荷量を示した6項目を除外し, 残った34項目について再度主因子法

表1 動機づけ雰囲気因子分析の結果

No.		成績雰囲気 ( $\alpha = .80$ )	熟達雰囲気 ( $\alpha = .88$ )
7.	他のチームメイトより上手であることが重要だ	.81	-.02
10.	他の人よりもうまいことが大切である	.80	-.08
4.	なにごと一番になることが重要である	.74	-.02
3.	他チームを負かすことが重要である	.67	-.02
6.	あなたが他の人よりも優れているのを示すことが重要である	.59	.04
1.	試合で他のチームメイトよりうまくプレーできた人は気分がよい	.50	.10
2.	自分の才能を高く評価してもらうことが重要である	.49	.01
9.	自分以外の人の成績をよく気にしている	.45	-.15
5.	試合に出られるかどうかは個人に才能があるかどうかで決まる	.41	-.24
17.	ほしい技術を習得するためには努力が必要である	.01	.84
12.	上達するために一所懸命に練習することが大切である	.02	.79
14.	新しい技術を習得するために頑張って練習することが大切である	.13	.78
13.	一所懸命に努力することは報われる	-.05	.76
11.	たとえミスをしたとしても努力し続けることが大切である	.04	.75
19.	自分なりにベストをつくすことが大切である	-.12	.69
20.	失敗することも学習の一部と考えている	-.05	.65
18.	自分達よりも強そうな相手でも向かっていく気持ちがある	.03	.58
16.	試合の結果よりも試合の内容を大事にしている	-.11	.55
15.	自分の弱点の克服にはげむことが大切だ	-.13	.52
	因子間相関	I	II
		I	-.15
		II	-

成績雰囲気: 能力について良い評価を得ることや, 否定的な評価を避けることを目的とする.

熟達雰囲気: 能力を伸ばしたり, 新しいことを理解し習得すること目的とする.

表2 動機づけ雰囲気に関する質問に対する回答の結果（6件法による得点）

No.		平均	標準偏差
7.	他のチームメイトより上手であることが重要だ	4.26	1.21
10.	他の人よりもうまいことが大切である	4.09	1.20
4.	なにごと一番になることが重要である	4.27	1.17
3.	他チームを負かすことが重要である	4.37	1.22
6.	あなたが他の人よりも優れているのを示すことが重要である	4.08	1.29
1.	試合で他のチームメイトよりうまくプレーできた人は気分がよい	4.73	1.10
2.	自分の才能を高く評価してもらうことが重要である	4.41	1.10
9.	自分以外の人の成績をよく気にしている	3.66	1.35
5.	試合に出られるかどうかは個人に才能があるかどうかで決まる	3.43	1.32
17.	ほしい技術を手に入れるためには努力が必要である	5.03	0.88
12.	上達するために一所懸命に練習することが大切である	5.04	0.83
14.	新しい技術を習得するために頑張って練習することが大切である	5.02	0.91
13.	一所懸命に努力することは報われる	4.94	1.02
11.	たとえミスをしたとしても努力し続けることが大切である	4.92	0.92
19.	自分なりにベストをつくすことが大切である	4.88	0.93
20.	失敗することも学習の一部と考えている	5.04	0.92
18.	自分達よりも強そうな相手でも向かっていく気持ちがある	4.85	1.01
16.	試合の結果よりも試合の内容を大事にしている	4.43	1.17
15.	自分の弱点の克服にはげむことが大切だ	4.92	0.94

(プロマックス回転)による因子分析を行ったところ、固有値1.0以上で、因子負荷量0.40以上の解釈可能な6因子を抽出した(表3)。また、各質問項目の6件法による得点の平均値および標準偏差について表4に示す。

因子の内容を見ると、まず第I因子には、プレー内容に関するフィードバックを与えたり、他のチームメイトの技能向上を後押ししたり、仲間の長所や技術改善を承認するといったような、チームメイトの上達を促す内容であることから「上達の支援」とした。第II因子は、普段の練習を大切にせずにその才能に任せてプレーしたり、チームとしてではなく個人としての成功に価値を見出したりしているような、集団においてふさわしくない態度が中心となっていることから「個人能力主義」とした。続いて第III因子は、チームの勝利を第一に考え、自分よりもチームを優先して協力し合い、部員全員の意思統一やチームの決まりごとを大切にするといった、集団としてのまとまりを重視する因子であることから、「チーム適応感」とした。第IV因子については、ミスをしたチームメイトに対する否定的な言動や態度がみられたり、仲間の荒探しが日常化していたりするなど、特にミスに関するネガティブな内容が多いことから「ミスの非難」とした。第V因子は、日頃の練習から自らを高めるためにライバルと切磋琢磨していたり、チームメイト同士互いに競い

合ってポジションを勝ち取り試合への出場機会を得たりといった一般的な競い合いだけでなく、各々の練習量にも「競争心」が表れているととらえることができるため「チーム内競争」とした。最後に第VI因子であるが、チームメイト同士の仲の良さや信頼関係といった親和や、集団目標達成のために各選手が役割を全うするという内容から「チームワーク」とした。なお、「チーム適応感」と「上達の支援」および「チーム内競争」、「チームワーク」に、低い正の因子間相関がみられた。また、それら6つの下位尺度の信頼性について、 $\alpha$ 係数により内的整合性を求めたところ、第I因子「上達の支援」は $\alpha = .85$ 、第II因子「個人能力主義」は $\alpha = .80$ 、第III因子「チーム適応感」は $\alpha = .89$ 、第IV因子「ミスの非難」は $\alpha = .82$ 、第V因子「チーム内競争」は $\alpha = .73$ 、第VI因子「チームワーク」は $\alpha = .72$ であった(表3)。そして、これらの6因子について検証的因子分析を行い因子構造のモデル適合度を検証したところ、 $GFI = .921$ 、 $AGFI = .908$ 、 $RMSEA = .047$ であり、モデルの説明力やデータへの当てはまりは保証されたといえる。

### 3) 選手個人に対するチームメイトの振る舞い

選手個人に対するチームメイトの振る舞いに関する質問項目(20項目)への回答結果について主因子法(プロマックス回転)による因子分析を行った結果、3因子を抽出した。その後、因子負荷量がいずれの因子

表3 チームメイト同士の関係因子分析の結果

No.		I	II	III	IV	V	VI
2.	他のチームメイトに上達するためのアドバイスを送っている	.89	.07	.05	.07	-.04	.05
1.	他のチームメイトに対し弱点を克服するように言っている	.86	.07	.03	.03	-.12	-.13
4.	他のチームメイトに、プレーの良かったところや悪かったところを教えている	.84	.09	-.10	-.02	-.00	.06
3.	上達したチームメイトがいたらほめている	.70	-.02	.06	.02	-.08	-.03
24.	チームメイトがミスした場合、どうすれば良くなるか教え合っている	.57	.06	-.03	.05	.18	-.14
5.	みんなの意見を大切にしている	.51	-.06	.11	.01	-.11	.03
31.	チーム内の誰かと比べて上手ければ、それで満足している	.00	.83	.14	-.08	.01	-.02
32.	いつもチーム内の誰かと能力を比べている	.23	.79	.05	-.12	.25	-.22
33.	自分が上手くできるときは、それをみせつけようとしている	.06	.76	.15	.05	.11	-.14
36.	努力よりも才能が大切と考えている	-.02	.70	.09	.28	-.14	.13
35.	試合のときだけ頑張っている	.04	.67	-.08	.11	-.17	.16
34.	才能のあるチームメイトは練習の手抜きをする	.10	.64	-.12	-.19	.04	-.11
28.	ライバルのミスを喜んでいる	-.19	.46	.03	.00	.15	-.15
22.	チームで決めたことはみんな守るようにしている	.15	.03	.82	.08	.02	.10
17.	みんな練習の手を抜かずに頑張っている	.16	.14	.78	-.12	-.10	-.06
21.	新しいことを覚えるときは協力し合っている	.20	-.08	.74	.03	-.03	.00
18.	練習や試合中、あきらめず頑張り続けるよう声をかけ合っている	-.01	.18	.65	-.07	.18	-.01
20.	面倒なことを誰かに押しつけたりせず、協力して行っている	-.03	-.16	.63	-.05	-.05	.20
19.	みんな助け合って練習している	.10	.04	.61	.12	.17	.14
13.	みんなの気持ちがひとつになることを大事にしている	.18	-.06	.58	-.07	.10	.15
12.	自分の都合よりもチームの都合を優先している	.00	.00	.50	-.18	.02	.08
14.	チームの勝利を第一に考えている	-.10	.03	.42	-.17	.07	.17
38.	他のチームメイトが落ち込むような発言をしている	.00	-.02	-.06	.80	-.05	.01
39.	他のチームメイトの弱点ばかり探している	.05	-.03	-.02	.80	-.10	-.00
37.	お互いのまずいプレーをけなし合っている	.13	.00	.03	.79	-.13	.09
27.	ミスをしたチームメイトをからかっている	-.09	.27	-.10	.68	.14	.06
29.	試合に出るためにお互いに競い合っている	.01	.14	-.03	-.07	.78	.02
30.	練習中はいつもチーム内の誰かと競い合っている	.10	-.20	.01	-.01	.70	-.01
15.	才能よりも努力が大切と考えている	.04	-.28	.16	.00	.66	-.03
16.	努力する姿を周りに見せている	.00	.13	.19	.12	.52	-.16
9.	みんな仲が良い	-.04	-.04	.15	-.11	-.10	.77
10.	お互いに信頼し合っている	.02	.03	.20	-.04	-.09	.75
7.	チームメイトの全員に役割がある	.10	.01	-.08	.08	.22	.61
8.	部をやめそうなチームメイトがいたらひきとめる	.25	.06	.00	-.24	-.01	.47
	因子間相関	I	II	III	IV	V	VI
	I	—	.03	.31	-.01	.18	.16
	II		—	-.01	.10	-.07	.03
	III			—	-.02	.27	.30
	IV				—	-.05	-.19
	V					—	.06
	VI						—

I : 「上達の支援」 ( $\alpha = .85$ )II : 「個人能力主義」 ( $\alpha = .80$ )III : 「チーム適応感」 ( $\alpha = .89$ )IV : 「ミスの非難」 ( $\alpha = .82$ )V : 「チーム内競争」 ( $\alpha = .73$ )VI : 「チームワーク」 ( $\alpha = .72$ )

表4 チームメイト同士の関係に関する質問に対する回答の結果（6件法による得点）

No.	平均	標準偏差
2. 他のチームメイトに上達するためのアドバイスを送っている	3.95	1.23
1. 他のチームメイトに対し弱点を克服するように言っている	3.83	1.18
4. 他のチームメイトに、プレーの良かったところや悪かったところを教えている	4.16	1.20
3. 上達したチームメイトがいたらほめている	4.45	1.07
24. チームメイトがミスした場合、どうすれば良くなるか教え合っている	4.21	1.07
5. みんなの意見を大切にしている	4.80	1.02
31. チーム内の誰かと比べて上手ければ、それで満足している	2.93	1.24
32. いつもチーム内の誰かと能力を比べている	3.58	1.32
33. 自分が上手くできるときは、それをみせつけようとしている	3.40	1.23
36. 努力よりも才能が大切と考えている	2.79	1.31
35. 試合のときだけ頑張っている	2.49	1.33
34. 才能のあるチームメイトは練習の手抜きをする	2.93	1.34
28. ライバルのミスを喜んでいる	2.84	1.33
22. チームで決めたことはみんな守るようにしている	4.51	1.16
17. みんな練習の手を抜かずに頑張っている	3.94	1.13
21. 新しいことを覚えるときは協力し合っている	4.28	1.09
18. 練習や試合中、あきらめず頑張り続けるよう声をかけ合っている	4.27	1.11
20. 面倒なことを誰かに押しつけたりせず、協力して行っている	4.08	1.07
19. みんな助け合って練習している	4.36	1.10
13. みんなの気持ちがひとつになることを大事にしている	4.73	1.10
12. 自分の都合よりもチームの都合を優先している	4.22	1.08
14. チームの勝利を第一に考えている	4.74	1.13
38. 他のチームメイトが落ち込むような発言をしている	2.62	1.29
39. 他のチームメイトの弱点ばかり探している	2.60	1.29
37. お互いのまずいプレーをけなし合っている	2.69	1.28
27. ミスをしたチームメイトをからかっている	2.94	1.42
29. 試合に出るためにお互いに競い合っている	4.45	1.27
30. 練習中はいつもチーム内の誰かと競い合っている	4.31	1.31
15. 才能よりも努力が大切と考えている	4.59	1.20
16. 努力する姿を周りに見せている	3.53	1.20
9. みんな仲が良い	4.77	1.12
10. お互いに信頼し合っている	4.45	1.13
7. チームメイトの全員に役割がある	4.65	1.17
8. 部をやめそうなチームメイトがいたらひきとめる	4.23	1.32

にも0.40に満たない項目や複数の項目に0.35以上の因子負荷量を示した5項目を除外し、残った15項目について再度主因子法（プロマックス回転）による因子分析を行ったところ、固有値1.0以上で、因子負荷量0.40以上の解釈可能な3因子を抽出した（表5）。また、各質問項目の6件法による得点の平均値および標準偏差について表6に示す。

因子の内容を見ると、まず第Ⅰ因子には仲間の運動学習の補助やミスへの励ましといった要素が含まれていることから、「チームメイトからの激励・支援」とした。第Ⅱ因子については、チームメイトから短所を強調されたり、意気消沈するような発言をされたり、

努力の過程ではなく結果の優劣のみで評価されたりするといったような、チームメイトからの承認が得られない状況を表していることから、「チームメイトからの否認」とした。第Ⅲ因子は、チームメイトから自分の努力や上達過程、選手としての特徴を認められ、ミスにも肯定的な態度をとってもらえるという、仲間から実力や姿勢、存在そのものを認められていることを基盤として成り立つと解釈できる内容であることから、「チームメイトからの承認」とした。なお、「チームメイトからの激励・支援」と「チームメイトからの承認」に中程度の正の因子間相関がみられた。また、それら3つの下位尺度の信頼性について、 $\alpha$ 係数によ

表5 選手個人に対するチームメイトの振る舞い因子分析の結果

No.		I	II	III
1.	あなたが上達したときチームメイトはほめてくれる	.89	.02	.01
2.	チームメイトは、あなたが上達するためのアドバイスを送ってくれる	.85	-.04	-.16
3.	話し合いの場などで、チームメイトはあなたの意見も大事にしてくれる	.80	.00	.02
7.	チームメイトと協力し合って練習している	.78	-.21	.06
4.	チームメイトはあなたの長所を見つけてくれる	.72	.08	.27
5.	チームメイトとの間に信頼関係がある	.64	-.22	.14
13.	チームメイトは、あなたがミスしたときはげましてくれる	.58	-.10	.29
16.	あなたがミスをしたときチームメイトはあなたを責める	.08	.87	.15
20.	チームメイトはあなたが落ち込むような発言をする	-.19	.86	-.03
19.	チームメイトはあなたの弱点ばかり見ている	.18	.75	-.07
18.	チームメイトは結果ばかりを見て、あなたの努力は見えてくれない	-.02	.72	-.00
17.	あなたはよく他のチームメイトと比べられる	-.01	.61	.09
14.	あなたのプレースタイルをチームメイトは認めてくれている	.03	-.01	.86
9.	あなたが一所懸命に努力したことをチームメイトは認めてくれる	.30	.06	.56
11.	あなたがミスしたとき、チームメイトはもっと頑張るように言ってくれる	.11	-.08	.49
	因子間相関	I	II	III
		I	-.15	.49
		II	—	-.18
		III		—

I：チームメイトからの激励・支援 ( $\alpha = .89$ )II：チームメイトからの否認 ( $\alpha = .84$ )III：チームメイトからの承認 ( $\alpha = .78$ )

表6 選手個人に対するチームメイトの振る舞いに関する質問に対する回答の結果（6件法による得点）

No.		平均	標準偏差
1.	あなたが上達したときチームメイトはほめてくれる	4.38	1.02
2.	チームメイトは、あなたが上達するためのアドバイスを送ってくれる	4.51	1.06
3.	話し合いの場などで、チームメイトはあなたの意見も大事にしてくれる	4.30	1.02
7.	チームメイトと協力し合って練習している	4.63	1.01
4.	チームメイトはあなたの長所を見つけてくれる	4.33	0.97
5.	チームメイトとの間に信頼関係がある	4.62	0.94
13.	チームメイトは、あなたがミスしたときはげましてくれる	4.42	1.02
16.	あなたがミスをしたときチームメイトはあなたを責める	3.07	1.22
20.	チームメイトはあなたが落ち込むような発言をする	2.65	1.37
19.	チームメイトはあなたの弱点ばかり見ている	2.78	1.22
18.	チームメイトは結果ばかりを見て、あなたの努力は見えてくれない	2.82	1.17
17.	あなたはよく他のチームメイトと比べられる	3.26	1.32
14.	あなたのプレースタイルをチームメイトは認めてくれている	4.17	1.10
9.	あなたが一所懸命に努力したことをチームメイトは認めてくれる	4.38	0.95
11.	あなたがミスしたとき、チームメイトはもっと頑張るように言ってくれる	4.48	1.00

り内的整合性を求めたところ、第I因子「チームメイトからの激励・支援」は $\alpha = .89$ 、第II因子「チームメイトからの否認」は $\alpha = .84$ 、第III因子「チームメイトからの承認」は $\alpha = .78$ という満足できる水準で

あった(表5)。そして、これらの3因子について検証的因子分析を行い因子構造の妥当性を検証したところ、GFI = .948、AGFI = .933であり、モデルの説明力やデータへの当てはまりは保証されたといえる。

2. 動機づけ雰囲気とチームメイト要因との関係

1) チームメイト同士の関係が動機づけ雰囲気及ぼす影響

チームメイト同士の関係因子が、動機づけ雰囲気に対しどの程度の貢献度で影響を与えているかを検討するため、重回帰分析を行った。チームメイト同士の関係を説明変数とし、動機づけ雰囲気の2つの下位尺度(熟達・成績)をそれぞれ目的変数として分析を行った結果、熟達雰囲気は第Ⅲ因子「チーム適応感」および第Ⅴ因子「チーム内競争」から有意に影響を受けており、成績雰囲気は第Ⅱ因子「個人能力主義」から有意に影響を受けていた(表7)。

2) 選手個人に対するチームメイトの振る舞いが動機づけに及ぼす影響

個人に対するチームメイトの振る舞い因子が、動機づけ雰囲気に対しどの程度の貢献度で影響を与えているかを検討するため、重回帰分析を行った。個人に対するチームメイトの影響を説明変数とし、動機づけ雰囲気の2つの下位尺度(熟達・成績)をそれぞれ目的変数として分析を行った結果、熟達雰囲気については第Ⅰ因子「チームメイトからの激励・支援」、成績雰囲気については第Ⅱ因子「チームメイトからの否認」から有意な正の影響を受けていた(表8)。

3) 動機づけ雰囲気およびチームメイト要因の競技レベルにおける比較

本研究における調査対象者の競技レベルについて、Vazou et al (2005) や菊池ほか(2010)の研究を参考に、選手の大会参加経験をもとに群分けを行った。全国大会出場経験者をレベル高群(111名)、全国大会には出場していない全道大会(県大会)出場経験者をレベル中群(159名)、全国大会、全道大会(県大会)いずれにも出場していない者をレベル低群(115名)とし、分析を試みた。3群の動機づけ雰囲気やチームメイト同士の関係、選手個人に対するチームメイトの影響に関する因子得点において一要因分散分析を行った結果、レベル低群に比べてレベル高群の「熟達雰囲気」因子得点が有意に高かった(表9)。なお、チームメイト同士の関係および選手個人に対するチームメイトの影響に関する因子得点については、「チーム内競争」において有意傾向ながらレベル高群がレベル低群を上回った他は、特に統計上有意な差はみられなかった。

4) 動機づけ雰囲気およびチームメイト要因の学年における比較

選手の学年によって、動機づけ雰囲気やチームメイト同士の関係、選手個人に対するチームメイトの振る

表7 動機づけ雰囲気への「チームメイト同士の関係因子」の影響(重回帰分析結果)

説明変数	目的変数	
	熟達雰囲気	成績雰囲気
チームメイト同士の関係因子	標準回帰係数(回帰係数, t値)	
I. 上達の支援	.01 (.01, .01)	.05 (.05, .84)
II. 個人能力主義	-.02 (-.02, -.39)	.35** (.36, 5.59)
III. チーム適応感	.41** (.40, 4.92)	.20 (.20, 2.33)
IV. ミスの非難	-.10 (-.10, -1.64)	.08 (.08, 1.26)
V. チーム内競争	.37* (.36, 3.83)	.12 (.13, 2.03)
VI. チームワーク	-.06 (-.06, -.99)	.01 (.01, .14)

\*\*p<.01 \*p<.05

表8 動機づけ雰囲気への「選手個人に対するチームメイトの振る舞い因子」の影響(重回帰分析結果)

説明変数	目的変数	
	熟達雰囲気	成績雰囲気
個人に対するチームメイトの影響因子	標準回帰係数(回帰係数, t値)	
I. チームメイトからの激励・支援	.30* (.31, 3.62)	-.06 (-.06, -.68)
II. チームメイトからの否認	-.10 (-.10, -1.87)	.23* (.23, 4.20)
III. チームメイトからの承認	.08 (.08, .94)	.06 (.07, .70)

\*\*p<.01 \*p<.05

表9 競技レベル別「動機づけ雰囲気」因子得点の比較

動機づけ雰囲気因子	自由度	平方和	平均平方	F値	p	多重比較
I. 熟達雰囲気	2	5.30	2.65	3.18	<.05	レベル低<レベル高
II. 成績雰囲気	2	3.78	1.89	1.06	ns	ns

表10 学年別「チームメイト同士の関係因子」得点の比較

チームメイト同士の関係因子	自由度	平方和	平均平方	F値	p	多重比較
I. 上達の支援	2	.38	.19	.20	ns	ns
II. 個人能力主義	2	4.45	2.22	2.27	ns	ns
III. チーム適応感	2	4.82	2.41	2.33	ns	ns
IV. ミスの非難	2	3.02	1.51	1.70	ns	ns
V. チーム内競争	2	10.66	5.33	6.50	<.05	1, 3年生<2年生
VI. チームワーク	2	3.66	1.83	1.99	ns	ns

舞いに関する因子得点に違いがみられるかどうかを検証するため、選手を1年生(131名), 2年生(134名), 3年生(124名)の3群に分け, 各因子得点において一要因分散分析を行った。その結果, 1, 3年生に比べて2年生の「チーム内競争」得点が有意に高かった(表10)。

#### IV. 考察

##### 1. 動機づけ雰囲気とチームメイト要因

###### 1) 野球部の動機づけ雰囲気

動機づけ雰囲気は, Ames and Archer (1988) や伊藤 (1997) によって, 熟達雰囲気 (mastery climate) と成績雰囲気 (performance climate) の2因子が想定されており, 多くの先行研究 (Seifriz et al., 1992; Walling et al., 1993; Papaioannou, 1994; 伊藤, 1997) において, その信頼性や妥当性が確認されてきた。そして, 野球部を対象とした平間 (2012) の研究や本研究においても, 同様の2因子を抽出できたことは, 上記の先行研究を支持する結果といえる。また, それぞれの因子について, 熟達雰囲気は「努力や学習」に, 成績雰囲気は「他者より高い成績」に価値を置くという, Ames and Archer (1988) の報告と同様の特徴が表れている。

###### 2) チームメイト同士の関係

チームメイト同士の関係についての因子分析では, 質問項目設定の際に参考にしたPeer-MCYSQ (Ntoumanis and Vazou., 2005) と同様に6因子が抽出された。

まず, 第I因子「上達の支援」は, 試合よりも日々の練習に費やす時間の方が長い高校野球の選手にとって, “上達すること”は主要な目的となりやすく, 技能習得はスポーツを行う楽しさのひとつ (和田, 1988)

であることから, チームメイト同士の教え合いは自然発生すると考えられる。第II因子「個人能力主義」は, 他者との相対的な比較において優れてさえいれば満足し, 上手にプレーするところを周囲に示したいという志向を持つ点で, 優越動機や顕示動機といった社会的動機と関連する。これらは, 一般的にスポーツが公にさらされやすいことからうなずける内容であるが, 同時に努力の軽視やライバルの脱落願望が垣間見える点で, 望ましい状況とは言い難い。第III因子「チーム適応感」は, “自分はチームの一員である”という自覚から生まれる要素であると思われる。これは, Markus and Kitayama (1991) が「東洋人の多くは自分にとって価値ある社会関係を見出し, 自身をその重要な一部と認識し, 周囲からもそう認識されることを目標とする自己観を持つ」としているように, 日本人には一体感や連帯感を大切にする意識が生まれやすく, 特に我が国の学校教育における部活動としての歴史が長い (尼崎・清水, 2008) 野球において, 活動の軸となってきた可能性がある。第IV因子「ミスの非難」は, チームメイト同士の誹謗中傷があったり, ミスをした仲間を嘲笑的のしたりするなど, 運動部活動に限らず, 一集団にとって好ましい状態ではない。こういった態度は個人, 集団を問わず動機づけに悪影響を及ぼすだろう。また, この因子は大学生への調査 (平間, 2012) では抽出されなかった因子で, 本調査対象の選手は, チームメイト同士の関係の中で, 仲間のミスへの反応を他の行動と区別して認識していると考えられる。第V因子「チーム内競争」については, 項目内容を見ると, チームメイトとの競い合いと努力が同居しており, 個人の才能を相対比較するような競争で

はなく、他者との競争によって自分を高めていこうという切磋琢磨の意識や、常に競い合うライバルが存在するという状況が伝わる内容であり、「いつもチーム内の誰かと能力を比べている」などの項目は含まれていない。これは、我が国の中学・高校運動部活動におけるメンバー間の競争には、欧米諸国のような他者との明確な能力比較をする成績志向的なものは現れにくいとした藤田・松永(2009)や早乙女ほか(2011)の先行研究結果を支持するものである。よって、本調査対象の高校野球部においても、中高生の運動部活動特有の競争の仕方が表れたと考えられる。最後に第Ⅵ因子「チームワーク」は、「チームの課題遂行や目標達成のための協働作業やメンバー間の相互作用、メンバーによる役割や能力に関する知識の共有、メンバー同士の信頼感や安心感、チームのまとまり(凝集性)といった行動的および心理的側面を併せ持つ概念」(山口, 2008; 池田, 2009)とされ、本調査においても、各選手の役割の自覚やチームにメンバーを引き付ける要素が含まれていることがわかる。

「チーム適応感」について、「上達の支援」および「チーム内競争」、「チームワーク」の3因子それぞれと相関がみられた。まず、「上達の支援」との相関については、選手たちが自分だけが成長すれば良いと考えるのではなく、チーム全体のスキルアップを目指すような「チーム適応感」が高まれば、技能習得につまづくチームメイトの上達をサポートする活動が増えていくと思われる。次に、「チーム内競争」との相関関係は、仲間から受容され集団に所属しているという意識の高まりが努力の継続につながり(岡沢ほか, 1996)、それによって仲間との切磋琢磨が促される状況を示していると考えられる。そして、「チームワーク」との関係から、チームワークの基盤として山口(2008)が示す「規範の共有」や河津ほか(2009)が挙げた「凝集性」(チームのまとまりの良さ)などの要素を含む「チーム適応感」は、チームワーク向上の一要素といえる。

### 3) 選手個人に対するチームメイトの振る舞い

選手個人に対するチームメイトの関わり方についての因子分析では、本調査対象の野球部における選手個人へのチームメイトの振る舞いについて3因子を抽出した。結果としては平間(2012)とほぼ同様の因子構造となった。

まず第Ⅰ因子「チームメイトからの激励・支援」は、部活動における主要目的のひとつであるスキル向上に不可欠な要素と考えられる。Duda and Nicholls

(1992)も、選手がミスなどで自身の力不足を感じる時に、仲間からの励ましや協力を得て上達に結びつけることで、成功を協調やチームワークに帰属する信念を持ちやすいとしており、この因子の重要性が窺える。対照的に、第Ⅱ因子「チームメイトからの否認」は、選手にとってネガティブな内容が並んでいる。このような、ミスに対する仲間からの非難や、ミスに基づく能力評価は、Ames(1992)やNewton et al(2000)も指摘するように、アスリートの能力認知や動機づけを不安定なものにしてしまうと考えられる。そして、第Ⅲ因子「チームメイトからの承認」は、チームメイトから自分のプレースタイルや努力が認められているといった内容であるが、こういった仲間からの承認は、スポーツ場面における青少年の動機づけや自己認識に対し、努力の喚起やパフォーマンス不安の低減といった好影響を及ぼすことが示唆されている(Vazou et al., 2005)。また、選手が賞賛や評価の基準をチームメイトに求めるというスポーツ集団の特徴(Ames., 1992; Weiss and Duncan., 1992)も、この因子には含まれていると思われる。

また、「チームメイトからの激励・支援」と「チームメイトからの承認」との因子間相関からは、選手個人がチームメイトから理解や尊重、激励や援助といったソーシャルサポート(土屋・中込, 1994)を受けている様子が窺える。

## 2. チームメイト同士の関係および選手個人に対するチームメイトの振る舞いの影響

### 1) 「チーム適応感」および「チーム内競争」、「個人能力主義」

熟達雰囲気は「チーム適応感」と「チーム内競争」から、成績雰囲気は「個人能力主義」から有意な正の影響を受けていたことから、本調査においても大学生への調査(平間, 2012)と同様に、“チームメイト同士の関係”の一部が選手の動機づけ雰囲気に対して影響を及ぼすことが分かった。なかでも「チーム適応感」は、高校、大学生に共通して有意に熟達雰囲気に影響を与えており、Deci & Ryan(2000)やVallerand(2001)も、集団に属している感覚や他者から受け入れられたいという願望が、熟達雰囲気にとって重要な因子であることを明確にしている。よって、「チーム適応感」のようなチームメイト関係は、野球チームの技能向上や努力を重視する雰囲気を促進する際のキーポイントとなるだろう。一方の「個人能力主義」は高校、大学生ともに成績雰囲気に対し正の有意な影響を及ぼして

いた。したがって、「チーム適応感」は熟達志向を、「個人能力主義」は成績志向を強める代表的な因子といえる。ところで、「チーム内競争」の熟達雰囲気への正の影響は、大学生にはみられなかった特徴である(図1)。通常、集団内の競争は成績雰囲気を促進するとされる(Ames., 1992; Vazou et al., 2005)が、本研究において、「チーム内競争」に努力を重視する項目が含まれたように、結果よりも練習量や練習への取り組み姿勢といった過程が重んじられることの多い高校野球部活動では、選手は互いのパフォーマンスだけではなく努力の程度についても競い合いやすいと考えられる。先行研究においても、藤田・松永(2009)が、中高生を対象にチームメイトによる競争が自律性への欲求に正の影響を及ぼすことを示し、伊藤(1996, 2001)が、高校生を対象に競争がチームへの適応やモラルを高めることを明らかにした上で、運動部の適切な指導として選手同士の向上を目的とした競争的環境の整備の重要性を説いている。このように、高校運動部活動において競争は重要な要素の1つであるといえ、本研究における「チーム内競争」因子が熟達雰囲気に有意な影響を及ぼしていたこともうなずける。そして、これらのことを加味すると、部員数や技能水準によって違いがあるため、高校野球全体にいえるとは限らないが、少なくとも本調査対象の高校では競争とチームの一体感を大切にす姿勢が同居しているというのが実状のようである。

## 2) 「チームメイトからの激励・支援」と「チームメイトからの否認」

熟達雰囲気は「チームメイトからの激励・支援」か

ら、成績雰囲気は「チームメイトからの否認」から有意な影響を受けており、“選手個人に対するチームメイトの振る舞い”も動機づけ雰囲気に一定の影響を及ぼしているといえる。このことから、チームメイトからのエールや手助けが熟達雰囲気を、チームメイトから認めてもらえない状況が成績雰囲気をそれぞれ助長することが推測できる。動機づけ雰囲気とチームメイトの振る舞いに関するこのような関連は前報(平間, 2012)においても確認されており、熟達、成績それぞれの雰囲気の促進要因がより明確になったといえる。

## 3) 競技レベルによる動機づけ雰囲気の違い

大会への参加経験をもとに選手を群分けし比較した結果、「熟達雰囲気」因子得点において、レベル高群(全国大会出場経験者)がレベル低群(全国大会・全道(県)大会いずれも未出場者)を上回った。このことから、チーム構成員の心理的な状態が顕著に競技成績に表れやすいことが想定される高校野球(尼崎・清水, 2008)においては、勝敗や能力の優劣に重点を置く成績雰囲気よりも熟達雰囲気の促進を目指す方が、結果的に競技成績の向上が期待できる。また、「チーム内競争」において、有意傾向ながらレベル高群が高い因子得点を示した。全国大会へ出場するような強豪校ともなれば部員数も多いため、必然的に試合への出場機会を求めてメンバー同士の競い合いが激化することは容易に予想できるが、そのような状況下においてもチームの動機づけ雰囲気を成績ではなく熟達へと導くことが、チームが高い競技レベルへと達するために重要であると考えられる。ただし、本調査対象者の競技レベルの範囲が限定的だったことや、レギュラーと非

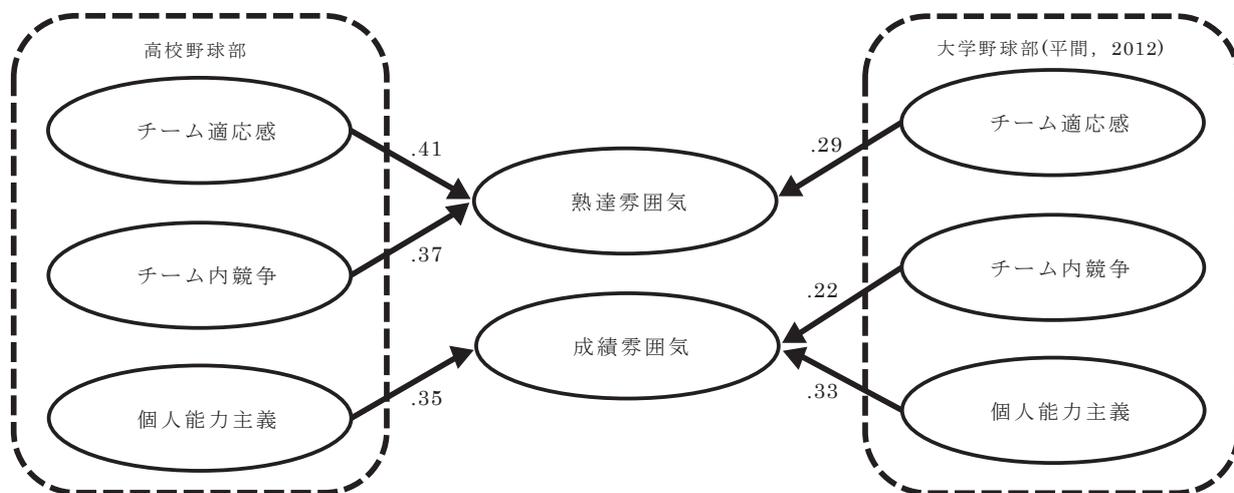


図1 チームメイト要因が動機づけ雰囲気に及ぼす影響 (高校・大学の違い)

※大学野球選手への調査(平間, 2012)結果をもとに筆者作図(数値は標準回帰係数)

レギュラーの区別をしていないことを考慮すると、今後は、さらに広い範囲での調査や選手のチームにおける立場などを踏まえた分析が必要になってくると考えられる。

#### 4) 学年によるチームメイト要因の違い

「チーム内競争」因子得点において、1, 3年生より2年生が有意に高い結果となった。一般的なチーム形成過程について考えると、チームへの所属期間が最も短く、メンバー同士の交流が上級生ほど活発ではないと思われる1年生や、既に長い時間をチームで過ごし、チームやメンバーへの愛着を感じていたり秩序が出来上がっていたりする3年生と比較すると、2年生は、レギュラー争いなどを含めたチーム内での地位の競い合いや、役割分担の明確化の途上にあることが多い。そのため、「チーム内競争」因子得点が高かったと考えられる。しかしながら、チーム内における競争は必ずしも同じ学年内で起こるとは限らず、競技レベルによっては最終学年である3年生の競争心が最も高まる可能性もあるため、学年別のレギュラー、非レギュラーの比率などを加味し、今後も検討を継続する必要がある。

### 3. 全体的考察および結論

本研究の目的は、高校野球部の動機づけ雰囲気に対しチームメイトが与える影響について、他の年代との違いも考察しながら検討することにより、動機づけ雰囲気とチームメイト要因との関連についてより深い知見を得ることであった。磯貝(2013)が、今後はチームメイトをはじめとした周囲の人たちとの感情的関係を視野に入れた動機づけ研究が必要であると述べたように、本研究がその一助となり、チームコーチングの発展に資することを期待する。

本研究では主に以下4つの結果が得られた。

- (1) 熟達雰囲気強く影響を及ぼしていたチームメイト要因は「チーム適応感」、 「チーム内競争」、 「チームメイトからの激励・支援」であった。
  - (2) 成績雰囲気有意な影響を及ぼしていたのは「個人能力主義」、 「チームメイトからの否認」であった。
  - (3) 「熟達雰囲気」因子得点においては競技レベル高群が低群を大きく上回った。
  - (4) 「チーム内競争」因子得点においては2年生が1, 3年生よりも有意に高かった。
- 「チーム適応感」や「チーム内競争」、 「チームメイト

からの激励・支援」が熟達雰囲気に強く影響していたことから、「チームの一員である」という自覚を持ち、連帯感やチームのまとまりを大切に「チーム適応感」および、パフォーマンスだけではなく、努力の程度も含めた「チーム内競争」、味方へのポジティブな声掛けやサポートといった「チームメイトからの激励・支援」の熟達雰囲気形成、促進における意義が見出せる。

「個人能力主義」が成績雰囲気に有意に影響していたことについては、先行研究(Ames., 1992; Duda and Hall., 2001; Nicholls., 1984)によって、個人のパフォーマンスにおける規範的能力の重視は、成績志向的雰囲気の特徴として定義され、平間(2012)も同様の結果を示している通り、チームメイトたちが選手同士の協調や努力よりも個人的な能力を重視している傾向がある場合、成績雰囲気が強まると推測できる。また、仲間からの否定的な言動が成績雰囲気を誘発するとVazou et al. (2005)も指摘するように、自身のチームにおける存在意義が見出せない「チームメイトからの否認」のような状況も成績雰囲気を促進してしまうと考えられる。

競技レベル高群が低群よりも有意に高い「熟達雰囲気」因子得点であったことについては、限定的な結果ではあるものの、競技成績の高さと熟達雰囲気が結びついた一例といえる。このことは、近年問題視されている勝利至上主義から脱却しつつも、選手がスポーツに熱中する要因すなわちスポーツの本質のひとつである勝利追求(岡端, 2001)を目指す上でのヒントとなると考えられる。つまり、スポーツ集団にとって望ましいとされる熟達雰囲気の形成を促すことは、同時に競技成績の向上にも一役買うことが期待できる。加えて、「チーム適応感」と共通点の多い集団凝集性(選手のチームへの所属意識の強さや所属価値の認知程度)と試合成績との間の正の関係を発見した阿江(1985)や、「未解明な部分も多い」としながらも、集団凝集性がチームパフォーマンスの予測に関わる要因のひとつであるという内田ほか(2011)の報告から、「チーム適応感」も競技成績の向上に関わっていると考えられる。

2年生が1, 3年生よりも有意に高い「チーム内競争」因子得点であったことについては、上述のように中堅学年においてレギュラー争いが活発化し得ることに加えて、運動部員の部活動ドロップアウト防止のために、1, 2年生時に起こりやすいチームメイトとの競い合いや軋轢など人間関係に関する障壁(和, 遠藤,

大石, 2011) を乗り越える必要があり, その後, 中堅学年から最上級学年にかけて協調性が高まってくること(荒井, 2011)を考慮すれば, チーム内競争の高まりはチームの形成・成熟過程における必須課題といえるかもしれない。

したがって, 結論としては, 熟達雰囲気と関連の強い「チーム適応感」や「チーム内競争」を促進するコーチングは, 高校野球部の熟達雰囲気の醸成や競技成績の向上にとって有益なアプローチとなり得るといえる。

#### 4. 今後の課題

以上のように, 本研究における高校野球部の動機づけ雰囲気に影響を及ぼすいくつかのチームメイト要因が明らかにされたが, いくつかの課題も見つかった。

まず, 本研究におけるチームメイト要因の中で, 大学生においてはみられなかった, 「チーム内競争」因子の熟達雰囲気への有意な影響が確認されたが, これは, 早乙女ほか(2011)や伊藤(1996, 2001)の先行研究を挙げて考察したように, 我が国の高校運動部活動においてメンバー間の競争が促される指導が行われていることも原因の1つと考えられる。よって, 今後は「チーム内競争」の促進が指導者によるものなのか, チームメイトによるものなのかについて明確に区別した上で, 動機づけ雰囲気との関連を検討していくこと。そして, チームメイト要因に関して, 学年差や大学生との相違が生じたことから, それらの原因解明のために縦断的研究が重要になってくること。また, 今回は「大会への参加経験」だけを基準にした競技レベル比較だったため, 今後はさらに競技レベルの範囲を拡大したり, レギュラーと非レギュラーを区別するなどして調査を行うこと。以上, 主に3点の課題解決が求められる。

#### 文献

- 阿江美恵子(1985) 集団凝集性と集団志向の関係, および集団凝集性の試合成績への効果. 体育学研究, 29: 315-323.
- 阿江美恵子・佐久間春夫・中島宣行・石井源信(1993) バルセロナオリンピック出場選手の心理的諸側面について—野球における面接調査—. 日本体育学会大会号, 44: 695.
- 尼崎光洋・清水安夫(2008) 高校野球部員を対象とした集団効力感の研究—集団凝集性及び部活動ストレスとの関連による検討—. 学校メンタルヘルス, 11: 23-31.
- Ames, C. (1992) Achievement goals, motivational climate, and motivational processes. In: Roberts, G. C. (Ed.) Motivation in sport and exercise. Human Kinetics: Champaign, pp.161-176.
- Ames, C., and Archer, J. (1988) Achievement goals in the classroom: Student's learning strategies and motivation processes. Journal of Educational Psychology, 80: 260-267.
- 荒井弘和(2011) 競技者における心理的パフォーマンスに対するコレクティブ・エフィカシーとその関連要因. 体育学研究, 56: 229-238.
- Brustad, R. J., Babkes, M. L., and Smith, A. L. (2001) Youth in sport: Psychological considerations. In: Singer, R. N. et al. (Eds.) Handbook of sport psychology: New York, pp.604-635.
- Carr, S., Weigand, D. A., and Jones, J. (2000) The relative influence of parents, peers and sporting heroes on goal orientations of children and adolescents in sport. Journal of Sport Pedagogy, 6: 34-55.
- Deci, E. L., and Ryan, R. M. (2000) The “what” and “why” of goal pursuits: Human needs and the self-determination of behavior. Psychological Inquiry, 11: 227-268.
- Digelidis, M., Papaioannou, A., Laparidis, K., and Christodoulidis, T. (2003) A one-year intervention in 7th grade physical education classes aiming to change motivational climate and attitude towards exercise. Psychology of Sport and Exercise, 4: 195-210.
- Duda, J. L., and Hall, H. (2001) Achievement goal theory in sport: Recent extensions and future directions. In: Singer, R. N. et al. (Eds.) Handbook of sport psychology: Hoboken, pp.417-443.
- Duda, J. L., and Nicholls, J. G. (1992) Dimensions of achievement motivation in schoolwork and sport. Journal of Education Psychology, 84: 290-299.
- 藤田 勉・松永郁男(2009) 運動部活動参加者の心理的欲求に影響するコーチ及びチームメイトの行動. 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 19: 71-80.
- 藤田 勉(2010) 体育・スポーツにおける動機づけの横断的検討: 先行研究の概観から. 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 20: 87-99.
- 平間康允(2012) 大学野球部における動機づけ雰囲気へのチームメイトの影響について. コーチング学研究, 26(1): 25-40.
- 池田 浩(2009) チームワークとリーダーシップ. 山口裕幸編 コンピテンシーとチーム・マネジメントの心理学. 朝倉書店: 東京, pp.69-85.
- 伊藤豊彦(1996) スポーツにおける目標志向性に関する予備的検討. 体育学研究, 41: 261-272.
- 伊藤豊彦(1997) スポーツにおけるチームの動機づけ雰囲気に関する研究. 山陰体育学研究, 12: 21-30.
- 伊藤豊彦(2001) 高校生における運動部の動機づけ構造の認知に関する研究. 調枝孝治先生退官記念論文集刊行会編 運動心理学の展開. 遊戯社: 東京, pp.148-162.
- 磯貝浩久(2013) 動機づけの文化間比較. 西田保編スポーツモチベーション—スポーツ行動の秘密に迫る!—. 大修館書店: 東京, pp.168-186.
- 和 秀俊・遠藤伸太郎・大石和男(2011) スポーツ選手の挫折とそこからの立ち直りの過程: 男性中高生競技者の質的研究の観点から. 体育学研究, 56: 89-103.
- 河津慶太・杉山佳生・永尾雄一・山崎将幸・王雪蓮・熊崎絵里

- (2009) スポーツチームにおけるチームパフォーマンス予測モデルの構築. 健康科学, 31 : 61-68.
- 菊地啓太・綿田博人・中嶋宣行 (2010) 大学野球部における部員のコミットメントと心理的成熟の関係について. 順天堂スポーツ健康科学研究, 2 (1) : 1-14.
- Markus, H. R., and Kitayama, S. (1991) Culture and the self: Implication for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98: 224-253.
- Newton, M., Duda, J. L., and Yin, Z. (2000) Examination of the psychometric properties of the perceived motivational climate in sport questionnaire-2 in a sample of female athletes. *Journal of Sports Sciences*, 18: 275-290.
- Nicholls, J. G. (1984) Achievement motivation: Conceptions of ability, subjective, experience, task choice and performance. *Psychology Review*, 91: 328-346.
- Ntoumanis, N., and Vazou, S. (2005) Peer motivational climate in youth sport: Measurement development and validation. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 27: 432-455.
- 岡端 隆 (2001) 生涯スポーツの外延的構造に関する一考察. 静岡大学教育学部研究報告 (強化教育学篇), 32 : 149-160.
- 岡沢祥訓・北真佐美・諏訪祐一郎 (1996) 運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究. *スポーツ教育学研究*, 16 : 145-155.
- Papaioannou, A. (1994) Development of a questionnaire to measure achievement orientations in physical education. *Research Quarterly for Exercise and Sport*, 65: 11-20.
- 早乙女誉・原田和弘・中村好男 (2011) 高校アイスホッケー部活動における動機づけ雰囲気と目標志向性との関連. *スポーツ産業学研究*, 21 (2) : 111-120.
- Seifriz, J. L., Duda, J. L., and Chi, L. (1992) The relationship of perceived motivational climate to intrinsic motivation and beliefs about success in basketball. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 14: 375-391.
- Smith, A. L. (2003) Peer relationships in physical activity contexts: A road less traveled in youth sport and exercise psychology research. *Psychology of Sport and Exercise*, 4: 25-39.
- Theeboom, M., De Knop, P., and Weiss, M. R. (1995) Motivational climate, psychological response, and motor skill development in children's sport: A field-based intervention study. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 17: 294-311.
- 徳永幹雄・吉田英治・重枝武司・東 健二・稲富 勉・斉藤 孝 (2000) スポーツ選手の心理的競技能力にみられる性差, 競技レベル差, 種目差. 健康科学, 22 : 109-120.
- 土屋裕睦・中込四郎 (1994) 大学運動選手におけるソーシャルサポートの構成要素とその機能. 筑波大学体育科学系紀要, 17 : 133-141.
- 土屋裕睦・中込四郎 (1998) 大学新入部員をめぐるソーシャル・サポートの縦断的検討: パーナウト抑制に寄与するソーシャル・サポートの活用法. *体育学研究*, 42 : 349-362.
- 内田達介・土屋裕睦・菅生貴之 (2011) スポーツ集団を対象とした集力的効力感研究の現状と今後の展望: パフォーマンスとの関連性ならびに分析方法に着目して. *体育学研究*, 56 : 491-506.
- Vallerand, R. J. (2001) A hierarchical model of intrinsic and extrinsic motivation in sport and exercise. In: Roberts, G. C. (Ed.) *Advances in motivation in sport and exercise*. Human Kinetics: Champaign, pp.263-320.
- Vazou, S., Ntoumanis, N., and Duda, J. L. (2005) Peer motivational climate in youth sport: A qualitative inquiry. *Psychology of Sport and Exercise*, 6: 497-516.
- 和田 尚 (1988) スポーツの楽しさに関する考察—する立場からの分析—. *京都体育学研究*, 3: 1-10.
- Walling, M. D., Duda, J. L., and Chi, L. (1993) The perceived motivational climate in sport questionnaire: Construct and predictive validity. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 15: 172-183.
- Weiss, M. R., and Duncan, S. C. (1992) The relationship between physical competence and peer acceptance in the context of children's sport participation. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 14: 177-191.
- 山口裕幸 (2008) チームワークの心理学—よりよい集団づくりをめざして—. サイエンス社: 東京, pp.19-28.

平成26年3月12日受付

平成27年5月21日受理

